

1-1-8-3 堂之上遺跡 久々野歴史民俗資料館

①施設案内

昭和 55 年に国指定史跡となった堂之上遺跡からの出土品をはじめ、久々野地域の歴史資料や民俗資料を展示している。また隣接する堂之上遺跡は、集落跡の整備復元を行ない、資料館とともに見学、研究の場として公開している。冬季間（12月から3月）は閉館となる。

所在地 509-3205 高山市久々野町久々野 2262-1

電話 0577-52-3459 ファクス 0577-52-3459

利用料金 入館無料

開館時間 午前 8 時 30 分～午後 5 時

休館日 月曜日

12月1日から翌年3月31日 問合先 久々野歴史民俗資料館

②堂之上遺跡の発掘調査

第 1 次～第 7 次調査は次のとおり行われた。

第 1 次—昭和 48 年度調査では発掘面積 280 m²を調査し、遺跡北部地区の住居群が検出された。第 2 次—昭和 49 年度調査では発掘面積 530 m²を調査し、台地中央部北半の重複する土壌群集中域及び一部の住居址を検出した。第 3 次—昭和 50 年度調査では発掘面積 350 m²を調査し、やはり台地中央部の土壌集中地域と一部の住居址を検出した。第 4 次—昭和 51 年度調査では発掘面積 518 m²を調査し、台地北半地域を広くトレンチによる調査を行い、中央部の土壌群の検出及び台地西北部、東部、南部にひろがる住居址群が検出された。第 5 次—昭和 52 年度調査では補足調査として第 4 次調査時に未了であった一部の住居址についての検出を行った。

以上 5 次にわたる調査により、縄文前期、中期の住居址は合計 24 軒（縄文時代前期中葉 4 軒、前期後葉 2 軒、中期後葉 16 軒）を数えた。

第 6 次調査（昭和 53 年 8 月 1 日～10 月 6 日）

第 5 次調査終了とともに民有地であった台地南部全域が町有地として買い上げられた。この結果堂之上遺跡の範囲はほぼ全域が町有地として保存されるはこびとなった。

第 6 次調査ではこの台地南半部にひろくグリッドを利用したトレンチを設定し、懸案であった遺構の広がりや集落跡の全貌をとらえる目的で調査が行われた。

新たに台地南端部にひろがる住居址 5 軒、台地中央南部では 3 軒の住居址が確認され、中央部土壌密集地域の延長と南側の限界がとらえられた。

第 7 次調査（昭和 54 年 8 月 1 日～10 月 11 日）

昭和 48 年から継続された発掘調査は、遺跡前面の町有地化にともない将来の保存整備の事業に入る必要が生じてきた。従って第 7 次調査をもって一時調査計画は中止することとなった。そして今回の調査終了時には第 1 次～第 7 次調査区域全体の航空写真を撮ることを最終目的とした。

第 1 次～7 次までに発掘された住居址は次のとおりであった。

縄文時代前期中葉 6 軒

〃 後葉 4 軒

縄文時代中期初頭	1 軒
〃	中葉 7 軒
〃	後葉 25 軒
合計	43 軒

③遺物

本遺跡出土の最古の遺物は縄文草創期に属する有舌尖頭器である。形態的には柳又型に近いものである。現在ほかには草創期関係の遺物はみられないが、将来本遺跡内及び本地域において草創期の良好な遺跡が発見される可能性を示している。

縄文早期では台地東部地区において押型文土器の出土が多くみられた。いずれも 2b 層中に含まれており、層位的にもその古さを示している。東部地区の包含層はなお多くの遺物を包含しているようであり、押型文の時期の遺構が発見される可能性も強い。第 7 次調査においても押型文の資料は増加し、型式学的にそれほど古いものを含まないが多少の細分が可能である。

前期～中期末までの土器型式については、今回新たに中期中葉段階の出土があり、前期中葉から中期末までの連続するすべての時期にわたる土器型式の出土をみている。

土製品では中期最末期に土偶の出土が顕著である。そして同時期と考えられる時間内に立体形を呈し、綾杉文をもつ種類と、扁平な形態で浅い沈線文をもつものとの 2 種類が存在する。厳密には両者に時間差があることを考慮しなければならないが、現状では同時期内に定形的な 2 種類の土偶を製作、使用していた宗教的意識を考えなければならない。

さらに両者を含めた土偶の遺存状態は全て脚部の破片のみであり、現在まで他の部分の出土をみない。何等かの使用上の意味があるのかも知れない。

石器類の出土は非常に多い。磨石、石皿の出土は非常に多い住居址炉石に使われる例などもみられ注意される。

大量な出土をみた磨石、石皿、あるいは打製石斧などの存在から植物性食料への依存度が高かったことが推定される。植物性食料に関しては、炭化したクリ、クルミ、ハシバミ？と考えられるものが出土している。特にクリの出土は顕著であり、浅い土壌中にバケツ一杯分近い量の出土した地点がある。炭化したクリは食用に供されなかった分であろうが、それをほるかに上まわる大量の堅果類の採集が行なわれていたのであろう。

大小の磨製石斧の出土も、当時の森林地帯への働きかけと、板材、ホゾのみられる材の発見から木材への加工が盛んに行なわれたことを示している。

中期最末期の時期に伴って滑石製管玉の出土が多いことも注意される。いずれも形式的に共通するものであり、地域的特徴を示していると同時に縄文時代の玉作りに新たな資料を与えるものである。

参考文献

「編集戸田哲也『堂之上遺跡 第 6・7 次調査報告書』岐阜県教育委員会、久々野町教育委員会発行 昭和 55 年」

「堂之上遺跡発掘調査団編著『岐阜県大野郡久々野町堂之上遺跡 ―縄文時代集落跡の調査記録―』久々野町教育委員会発行 平成 9 年(1997)」